
中二病女と腑抜けな男

帝国皇帝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

中一病女と腑抜けな男

【NZマーク】

N9922X

【作者名】

帝国皇帝

【あらすじ】

荒スジである。特に意味はありません…「めんなさい」（笑）

中一な彼女（前書き）

変な本のある本屋、『岸本書店』でいつも店番をする主人公は、中一病少女と出会い…。

「あー、疲れたあ」

「こう愚痴を言つても変わらないのは知つてゐる。俺は、岸川書店の息子たる岸川港（きしかわみなと）16歳。1ヶ月前に入学して高校は行つてゐるけどはつきり行つて特に何も無い。」

「港。早く本だけ！店開けるから。」

こう言つるのは親父、岸川書店の店主岸川健夫だ。うちほこの通り本屋をやつてるが、あまり繁盛してない。置いてあるのは出てくる時代でも間違えたかのような内容不明な革の分厚い本や、研究書、小説だの漫画だの雑誌だのは隅つこのはうに棚一つ申し訳程度しかない。

「ねえ、もう小説バンバン売らない？まったく意味不明な本あってもしようもないじゃん。」

「馬鹿もんが。本に失礼だろが！」

「つて言つたつてね？…。」

親父は頑固だ。だからこそこにある古い本が十何年も生き永らえてるのである。だけどもこの商売にならない本をいつまでも置いている理由はあるらしく…。けど何も言わない。と言つか覚えてないんだと思う。

「商売上がつたりじゃ店閉めるしかないよ。」

「…うるさいわ。」

「今度は頭を殴られた…。まあ仕方ない。」

俺はいつもの問答を終えた後、いつもどおりの坂道を駆け下り学校へ向かつた。はつきり言つて友達は無いに等しい…。たまにノート見せてくれないかと尋ねられること以外席の隣人とも話したこと無い。頑張つてこの高校に入つたはいいが、特に何も面白いこともなく、店のレジ打ちのため部活にも入つてい無い。俺の家は大通りの坂道沿いにあるレンガ造りの本屋である。ちなみに言つと、本

屋の一部は親父の趣味でカフェになっている。高校はこれまた坂を下りてすぐの角を曲がった先にあるせいかなり近い。ものの2・3分で着くと、二階の昇降口から3階へと上がる。クラスは1・4・三階のせいか、桜の匂いが鼻をつく。いつものように窓際中ごろの自分の席に座り、チャイムを待つ。クラスは喧騒に包まれている。聞いても特もない話だ、聞く必要がない。中学時代、俺はほかの友達の家より少し遠かつたため、高校は皆と離れてしまった。なんてことを思い出す。リア充だったあの頃は。チャイムが鳴り、みんな席に着く。みやけたつぐまもなく教室のドアが開かれ担任が入ってきた。名前は……、三宅高次だったか。あまり人の名前を覚えるのは得意ではない。

「起立、氣をつけ：礼」

「おはよう、今日の授業に特に変更はない、みんなしつかりと授業を受けるように。」

それだけだ。この担任には教師特有のらしさがない。時々この人は本当に教師なのかと疑いたくなる。まあ、話の短いことに悪いことは無い。はて1時間目は何だったか…。あ、数学か。特に問題なし。と思つて席に座り直そうとしたとき…

ええー抜き打ちテスト！？

一人の声で、クラスの空気が春にもかかわらず凍りつく……。

案の定テストは散々で、自分がこんなにも頭が悪いのかと呪いたくなつた。まあ、どの道本屋を継ぐ俺にはあまり関係のない話だが…転職するときに…と、珍しく親父がまともな事を言つたから行つてゐるだけ。クラスの皆も散々だつたらしく、どんよりしていた。一日の授業も終わり、鞄を持つて教室を出る。階段を降り、昇降口

を出て正門を出る。朝と同じ道を行き、店にもどる。相変わらずガラガラ…。鞄を一階に置いてレジに入つて入荷した本を少し読む。汚さず、跡を付けず、慎重に…。どちらどれだけ時間が過ぎたのか、文庫本の半分を読んではいると滅多に挙めない客の姿があつた。まづうちの店は万引きはない。万引きしても意味ないものが手前にあるからだ。その客は奥の本棚まで行つてうろちょろしていた。そつ、明らかに挙動不審。

「まさか、なあ…。」

まあ、一応声を掛けてみよう…。だが何故だらう。全身が「こいつと関わるな!」と警報を鳴らしている。黒い長髪の後姿、ん?よく見ればこいつ…うちの学校の生…徒じやないか?

「君…な、何してるの?」

「つ!あ、あなたはつ!つ!…追手か…。」

「は?」

全くもつて意味不明である。追手?さつぱりだ…。

「な、なんでもない!」

頬を赤らめる少女、ああ、こいつ中一病入つてゐるな。そして盛大に鞄で本棚の本をふつ飛ばしつつ走つて店外へ…。しかしそく店内に戻つてきた。若干濡れて…ん?と思つて空を見遣ると土砂降つていた。あーこいつ帰れないのか。なんてことを考えて、仕方がないからタオルを持つて声を掛けに行く。

「はい。災難だったな。」

「うぐ…。あなた誰なの?その制服…同じ学校っぽいけど…。」

落ち着いたのか普通に喋る少女。黒い長髪に整つた顔立ちの少女は、三笠木葉みかやじのはと言つ。彼女は16だから全く関わりがなく、双方知らなかつたのだ。ココジや狭いなと思つて、ある程度広いカフェの方へ案内する。

「へえ…あなたのうちはカフェまでやつてるの?じゃ、おいしいコーヒーでも貰おうかしら…。あ、もちろんブラックね。」

「はいはい、140円ね。」

「あ、高いのね。」

「一応豆は好い物だ。それでも高い言つなり。」

「言つなり?」

挑戦的な視線を向けてくる。

「まあ……。い、よ、一杯だけお、い、るよ……。傘すり置いてないからな……。」

「あら優しいのね。それとも女に甘いだけ?」

なんだこいつ……さつきから態度がガンガン変わつてゐるぞ!?

「雨上がりたら帰れよ。」

聞いてないといつ風にコーヒーを啜る。そう、とても幸せみたい。

結局…。その一

結局…、雨は止まずにかれこれ一時間も土砂降りでいる。まだ降らし足らないのか、いついつに収まる気配が無い。

「やまねーな…雨。」

「…」

「一ヒー一杯も齧られた挙句、商品を立ち読みをして時間を潰す」という暴挙に出た三笠木葉は、最初に小説内の登場人物にキレ始め、本棚に激震が襲うようになつたためハリセンでひっぱたいて“静かにさせた”ところだ。まあ、こうして静かにしてくれるのは大変よろしいことだと思っていたら、今度は急にぶつ倒れたではないか。

「おい、何寝てんだよ。」

「お…なか…が…へつた…の」

「うげつ…。」

「…こえ~。夢見心地でそんな声出されるともつとこえ~…!!…!!…うちの冷蔵庫には酒のつまみ（モチのロンで親父の。）と…。あと何も無かつた~。餓死りそうなコイツを放置すんのもなんだし」といつことで近くのスーパーのタイムセールまで残り五分などを確認し、傘も邪魔なので差さずに猛ダッシュでスーパーへ出かけた。しばらく運動してないからか、脚が重いような気がする。一応タイムセール一分前に到着し、かごを持つて近くの商品棚を適当に漁る。説明すると、このスーパーはタイムセールス中にレジを通ると五十パーセント引きというシステムだから先に準備をして並ぶのが一番効率的。とりあえず、ネギと鳥もも肉、レタスやトマト、きゅうり。そういうればドレッシング切れてたと思つて塩ダレのドレッシングを買い物かごに入れてレジに並ぶ。一番少ないところへ。

「ふう、この人数なら…。」

とりあえず、馬鹿みたいに買い物かごをいっぱいにしている人居ない。タイムセールが始まりさつさかレジを終え、店を出る。相

変わらずの土砂降りには滅入るけどまたまた走つて家まで帰つた。

「ただいまさーん。おーい、親父い、夕飯どうすん？」

「いらん。」

まあ、酒のつまみもあるし、親父は勝手にやつてくれるだらう。

「しゃーない。作るか。」

くたばつてゐ三笠に健康食品の「J.O.U・N.O.U」を食べさせてから、一階のキッチンに駆け上がる。やつこえは、もう八時近く。妹の奈帆ももういい加減に引きこもり図書室から帰つてくるだらう。そんな事を思いながら手つ取り早くネギと鳥もも肉を塩コショウで炒める。この手抜き料理は、スーパーの惣菜から発案された究極の早飯。レタス、トマト、きゅうりも適当にぶつた切つて皿に盛つて。こうして、ものの五分でみるみるひげに出来上がつた夕飯をテーブルに置く。

「あーい、出来たぞ。」

「いいにおーい。上がつていいの？」

「どうしてもつて言つなーだ。」

「じゃつ、遠慮なくつ。」

一階に駆け上がるその軽やかな足取り。つい数分前に恐ろしい声を吐き、くたばつていた人間とは到底思えない。思えるわけない。

「わー、あなたつて料理もできるの？」

とても手抜き料理だとは言えないこの喜び様..。若干引きつった感じで目をきょろきょろさせてたら、丁度妹が帰つてきた。

「ただいまー。ん、この良い匂いは…！…」

そう、いい匂いを放出している手抜き料理に引き寄せられて、手を洗い、一階に駆け上がつた瞬間..。

「あ、あんちゃん！…！…ガツールフレン…ド…いたん？！あやー…！」

なんと言つ早合点な妹なんだ..。コイツ理解が早いのは良いが、早合点の頻度と質の悪さに関してはピカ一だ。

「あのなあ…。」

その声も虚しく、妹は階段を駆け下りて（
いただきたい）親父に拳骨を食らっていた。

「へえ…妹さんいるんだ…。」

「モーモーお湯せがりなんだよ。」

「想像に任せやわ。」

あー、この辺つひとと並べてやつに限つて居ないんだつたはず。まあ、腹が減つて仕方ないのでまずは食べてしまおう… つて三笠のヤツ何時までこの家に居座るつもりだ？長々居座られる事の無いようにもなおさらダラダラさせてられない。奈帆もやって来たことだし。

「おい、もう食ひなご。

『いただれもーす。』

あ、ハモッた。そのときの顔もなかなか見物だと思つた。

食事が終わって皿を洗い終えると、三笠が聞いてきた。大概みんな良くなきも悪くなきも必ず聞いてくる。

「お母さんは？仕事？」

「奈帆を産んでもすぐに死んだの。確かあれば事故だつた…はず…。あれつ、十四年も前だとよく覚えていないもんだからな…。」はつきり言つて覚えてない訳が無い。あんな死に方されちゃあな…。「そなんだ、つてことは家事とかは岸本がやり続けるの?」「そうだなう。少なくとも奈帆にだけは惨めな思いはして欲しく

あのかわいそうって言う視線とかは特に嫌なもんだからいいからな。

50

あえて明るくそつと語り。でなければとつぐに鬱の始まり始まりだ。この類の話をしない事でもそうなる確率を大幅に減らして。十四年なんていうのはなかなかあつという間でもあると思つし、家事つてなかなか考え方を邪魔してくれるから、考え込まずにやつてこれるというのもある。

「強いのね…。あたしはね六歳の時に両親が離婚して、どちらも引き取る気ナシだったの。まあ、愛されない子供って言つやつかし

ら?だから保護施設に入れられていたけどそれも去年で終わり。今一人暮らしで何とかやつてるみたいな感じだし、中学生よりも前からめりこむ物は本とアニメ、漫画だけ。中一病みみたいな中一病つてやつて逃げてきた感じもあるかも。」

なかなかこいつも重い家庭事情があつたようだ。長い黒髪と調度品のように調つた顔からは想像できない。人間やつぱり見た目じや分からぬ物だ。なかなか面白いかも。すると三笠がおもむろに…。

「面白い話が聞けたわ。そろそろ帰るから。」

「送らなくて良いのか?」

「大丈夫よ、あたしの家はなかなか明るい通りにあるんだし、もし同学年の人につつかつたら変な騒ぎは確定物よ?」

「まあそうだが。年頃の少女を夜に一人で帰らせるといつのは俺の信条に反する気がしてならない。」

「どんな信条よ。全く聞かせていただきたいわ。」

「そうか、なら一時間でも三時間でも話してやるつか。」

「わすがに遠慮しといてあげるけど、どうしてもつて言ひながら。」

「」

「断る!」

「冗談を本物と思われては困る。家の玄関までそんな話をしてたと思うと、壁一枚先の奈帆が盗聴してるのでとこ恐怖感に襲われた。だからなんだという話だけど。」

「それじゃ。コーヒーはツケでね。」

お前にツケという概念なんか有つたのかと問いたい衝動を抑えてからうじてため息で抑えた。

「じゃあな、ほんと、次は客としてきてくれ。」

「わあね、あたしの気分によるわ。」

「よつてもよらなくてもつちは客以外としては認識しないからな。」

「」

「なーんだ。残念だわ。きっと女には優しいと思つてたのに。」

「思い込みはよしてくれ。」

「」

「分かった事にしておへわ。じゃ、また明日。」

「会わない事を願う。」

「ひどここと嘘うそのね。」

「早く帰れ。」

「うへして嘘うそ、そして面白く一口が終わった。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9922x/>

中二病女と腑抜けな男

2011年11月24日18時59分発行